

平成 29 年度 第 1 回横浜市地域福祉保健計画策定・推進委員会
分科会 1 「多様な主体の参加と連携による支え合いの地域づくり」
第 1 回

日 時	平成 29 年 6 月 15 日 (木) 14 時 30 分～16 時 40 分
開催場所	横浜市健康福祉総合センター 9 階 902 会議室
出席者	井上委員、合田委員、佐伯委員、竹谷委員、中野委員、名和田委員、畑尻委員、福松委員、江森委員、仲丸委員、福嶺委員 (11 名)
欠席者	森本委員
開催形式	公開 (傍聴者 0 名)
オブザーバー	市民局市民活動支援課、旭区福祉保健課
事務局	健康福祉局福祉保健課、横浜市社会福祉協議会地域活動部、横浜市社会福祉協議会企画部
議 題	<p>議事【議事 1】分科会長の任命について</p> <p>【議事 2】分科会の設置について</p> <p>【議事 3】分科会 1 の進め方について</p> <p style="padding-left: 20px;">ア 検討課題 (論点) の整理</p> <p style="padding-left: 20px;">イ 検討スケジュールの確認</p> <p style="padding-left: 20px;">ウ 検討実施にあたっての現状・課題認識に関連するデータの説明</p> <p>【議事 3】幅広い市民参加の実現に向けて</p> <p>報告【報告 1】次回分科会に向けた説明</p>
議 事	<p>開会</p> <p>議事</p> <p>【議事 1】分科会長の任命</p> <p>・竹谷委員の推薦を受け名和田委員が分科会長に選任された。</p> <p>【議事 2】分科会の設置について</p> <p>※議事 3 と合わせて説明。</p> <p>【議事 3】分科会 1 の進め方について</p> <p>(事務局) 資料 3 (分科会 1 の進め方) 資料 4 (横浜市の状況データ) について説明</p> <p>(名和田分科会長) データ、分科会位置付けについて確認・質問はあるか。</p> <p>(江森委員) 私共法人でよく使っている「支える側、支えられる側の区別なく」というところで、厚労省、塩崎大臣の発言した『我が事丸ごと』地域共生社会実現」という言葉を引用しつつ活動していくのがよいと考えている。</p> <p>資料 2 検討会の意見の中に「支援を必要とする人を支える」という文言があったが、「支援を必要とする人でも支えられる」という言葉も出てきた方がよいと思う。</p> <p>私の施設の利用者はそのような活動をしており、地域のケアプラザに登録し、利用者が高齢の方の家に行き草刈りやお手伝いをする等、年間、不定期の方で 300 名以上が活動している。定期的なボランティアの方も加えると年間 1300 名を超える。</p> <p>そのような活動があり、施設の利用者が地域で活動できる状況をもう少し増やしていけるとよい。</p>

また、施設から地域への発信としては、地域ケアプラザを通じて利用者に「認知症サポーター養成講座」を受けさせていただいた時、地域の方にも10名程来ていただいた。また、老人クラブ連合会の総会も施設で開催する関係上、「弱者でも支えられる」という意味において前期高齢者の方に注目し、老人クラブの方は社交性が高く若々しい方が多いので、「是非、皆さんが認知症サポーター養成講座を受けてください」と話をさせていただいた。

今、小学生や中学生もよくこの講座を受けているが、年齢が近いの方が細かいところに気がついてもらえるので、そのような活動を上手くアピールしていけるものがどこかにあるとよい。

(名和田分科会長) 次の議事に係わる点も話されたが、『我が事丸ごと』の横浜市の位置付けの点と、「支えられる側と支える側」について、「支えられる側と思われる人が支える側に回れる場合も十分あるし、奨励されるべきだ」ということは共通理解だと確認したい。

地域包括ケアについて、横浜市、あるいはこの分科会ではどのように考えているか。

(事務局) 地域福祉保健計画の地区別計画がその部分で、そこにある地域課題を地域では自分達の課題だと認識しそれぞれの立場で何ができるかを考えている。まさに市計画、区計画、地区別計画の方針がその部分に係わってくるのだと横浜市として認識している。

今後、「支援を必要とする人に支えられる」という視点では、いろいろな立場の人がいて地域社会が作られなくてはいけない。そこを上手く書くために皆様の立場のいろいろな実践の中で感じていることを出していきたい。

(名和田分科会長) ご紹介いただいた取組こそが、まさにそれである。

(江森委員) 昔から町内会の方と上手くやっているが、我々も最近になってやっとそこに目がいくようになった。

ネットワーク連絡会の会議に出た時に役所の人にとっても耳の痛い話を聞いた。ある地域の民生委員の方が、「最近“ネットワーク”と言うけどネットワークは最初からあるよ。知らないのは役所の方々だけじゃないの」と言われた。その地域のネットワークを全て把握するのは難しいのは事実で、それをどのように組み立てていくのかと考えた時、各区社協、ケアプラザの役割が重要となる。ケアプラザは、高齢者の包括支援だけでも大変なのに、これから先全てを含めた包括支援を考えていかなくてはならないが、そのようなところも含めてやっていかないと難しいと感じた。その中で多くの社会福祉施設は、実は地域のネットワークに関わっていないのではと思う。そこは、連合町内会や民生委員と連携して、ケアプラザや地区社協に出向くとある程度情報が得られるなど。

(名和田分科会長) 地域包括ケアの話が厚労省から打ち出されていて、各地域ケアプラザには生活支援コーディネーターが一人配置された。それを地域福祉保健計画でどう受け止めるかではなく、ここは地域の立場で話し合っていけばよいと思う。

(事務局) 国の発言で今まで取り組んできた方向性が大きく変わるとは考えていない。

町の課題、地域の課題はそれぞれ違うので、住民を含め機関や団体、住民に何ができるか考えて取り組んでいくことが大事だと思う。そして町々でその活動が広がっていくと良いと思う。

(名和田分科会長) 既に議論に入りつつあるので、本日の本題である議題4にうつる。

【議事4】意見交換「多様な主体の参加と連携による支え合いの地域づくり」

(名和田分科会長) 資料5まとめた表は、次世代、高齢者、当事者…と分けられており、本日はあらゆる市民までを扱う予定である。まず、最初のテーマ、次世代(小・中学生)から議論を始めたい。

(事務局) 本日は、少し広く意見をいただきたい。これまでのいかに地域福祉保健の領域を広げていくか、そのために今まで参加をされていない皆さんの参加を得ていくかを課題として取組んできた。では、4期計画に向けてどうしていくかの議論をいただきたい。

《次世代・小中学生》

(事務局) 資料5(次世代・小中学生)について説明

3期計画のポイントとしては、「子ども達、子育て世代と地域のつながりをいかに作っていくか」、或いは、「次世代の子ども達がいずれは地域の担い手になることを見据えて地域の愛着をどのように作っていくか」ということを大切にしてきた。それを伝えていくために、学校・子育て支援機関と連携していこうということが中身として計画にうたわれていた。われわれとしては、世帯と地域をつなげる取組を推進していく。或いは、その取組事例をきちんと周知していく点が役割として書かれている。第3期計画を推進している中での課題は、単発のイベントはどこも広がっているが継続的に地域と子ども・子育て世代が係わることや子育て世代の方が地域の活動につながっていくところがまだ十分ではないということ等がある。これらの課題を踏まえて第4期計画はどうしていくか、また、3期計画で上がった視点以外に大事な点があれば合わせて意見を出していただきたい。

(畑尻委員) 一つ目、連合町内会は地域によって違うということ。保土ヶ谷には20の連合町内会があるが、地域の状況が皆違う。その中でどう対応するか、私のところの岩間地区には、岩間地区民児協と星川地区民児協とふたつある。ふたつあるからやりにくいけど切磋琢磨する良い面もある。情報交換もしている。また、地域の身近なところから取組もうと15~6人で保土ヶ谷のJR近くのデイサービスを見学に行く等している。

二つ目は、次世代と地域のつながりというが、岩間地区では「ゆるやかな繋がりのあるまち 岩間地区」と銘打ち3世帯交流を挙げている。3.11のような“強い絆”はできるはずがない。緩やかなつながりで初めて強くなるというのが私の考えである。行事に参加したくないと言う人にも少しずつ興味を持ってもらい進めていくやり方を大事にしている。

先日も保土ヶ谷区の区大会で「はじめから強い繋がりではなく上手くいかない、地域とはこんなものですよ」と、岩間地区のことを発表させていただいたが、皆さん「緩やかなつながり」に非常に興味を持っておられた。

三つめは、区社協、地区のケアプラ2つ、中途障害者施設等、各施設に声をかけて三世代交流のミニ運動会をやった。「まごころ(孫・子・老)を笑顔でつなぐ運動会」。皆がスタッフになり開催した。地域が交流することが上手くいっている。三世帯交流が絶対必要だと思っている。

最後に行政にひとこと。イベントは土日にもあるが、会議はたいてい平日なので若い人が出られない。3回に1回は会議を土日に開催してもらいたい。

(名和田分科会長)最後の件については、第1回地域福祉保健計画推進委員会の会議は、夜に開催を試みたのを思い出した。

(竹谷委員)老人福祉法が昭和38年に出来た時の老人会の主旨は、戦後復興に活躍された、また、戦争から帰って来た高齢者へのご苦労様がメインで癒しが中心だったが、ここ10年くらい前から江森委員が言われたように元気な高齢者が増えて来たため、元気な高齢者になり、社会に参画するための会に変わりつつある。

昨年からは横浜市は老人会により一層社会貢献に力を入れるように、特に介護保険法改訂案で地域に支援が求められるようになったこともあり、支援を要請されている。しかし、老人会の中にいる人は昭和38年までの発想で自分達はお客様と考えている方も多く舵取りは難しい。極端に言うと役職も癒しのうちで、80~90歳になっても役員を務めることが、それなりの待遇もあり、癒しになっているが、反面老害を助長していることもある。役職を待遇でなく奉仕に、社会にお手伝いをするという意識に切り替えるのは非常に難しいため定年制を唱えた。今、始まったばかりの取組だが少しずつ身を結びつつある。

では、次世代のために社会で何をやるか、自治会に現役の方もいるが、行事(夏祭り、正月のお祭り、運動会)は、若手高齢者が中心になってやらないと持続性がうまくいかない。もう少し身近な例では、毎年、小学生が公園の樹に樹木名をかけ、その札の裏に自分の名前を書く活動をしている。小学生に公園は自分たちのものだという意識が広がり大変評判が良くてやめられなくなっている。

他には、学校で、歴史、昔話を高齢者が定期的にでかけていき話をして地域に愛着をもってもらおう活動を継続的にやっている。

このように、幼稚園、小学校、中学校、高校で、昔遊びやゲートボール等、生徒・先生・高齢者の三世代の交流をやるようにしている。そのようなことをやって地域に目を向けてもらっている。

先ほど畑尻委員が言われた「緩やかなつながり」は非常に大事で、我々の老人会のスローガンに「ゆるやかなつながり、しっかりと協力」を掲げている。

(佐伯委員)学校現場から、学校地域コーディネーターは、横浜市に500校近くある公立小中学校の半分ぐらいに配置されている。ボランティア団体を各校で立ち上げているが、この春から文科省の「地域学校協働事業」として、地域と学校が一緒にま

ちを作っていく活動につながる方向認識が生まれた。

今、学校は地域とのつながりを大事に、子どもが地域を大事に思えるように町探検をしたり、その地域で働いている人にインタビューしたりいろいろ地域に出て行っている。

幸ヶ谷小では、シニアの会を日中学校のフリースペースで月1～2回やっていた。それを子ども達が見て、自分達の総合授業で福祉を扱うクラスの子が提案して、昨年、交流会を開くという活動があった。

学校の先生も福祉を意識しており、社会科や総合の授業で必ず福祉を勉強している。以前はなかったが、老人ホームに出かける等、違う世代の人と交流する機会がある。ただ、学校はカリキュラムに沿って勉強していくので、そこに落とし込めないと実施は難しい。コーディネーターもそこはよく注意されていて、何でもよいから持っていくことはできない。学校の授業の中で足並み揃えていけることがあれば授業に取り入れてもらえる。

学校の中には、私達のようなボランティア団体の他におやじの会等があり、地域に出て行っているいろいろな人と関わりをもとうという意識が強くなっていると感じている。

(名和田分科会長) 質問なのだが、学校にカリキュラムという制約があるというが、例えば前年度の適切な時期に相談をすれば検討の余地があるということはあるのか。

(佐伯委員) そういうことです。早めに種をまくと1年後に実現するということはある。シニアの会との交流も思いがあってから1年後に実現した。

(名和田分科会長) 企業も同様だが、このようなことは適切な時期があり、予算が決まる前にはできないので、そこは相談すれば割と検討してもらえるとということ。

(竹谷委員) カリキュラムに影響されないでできることで、給食の時間に高齢者と一緒に食事をするという交流を1年に1回だけやっている。その時は、ただ食べるだけでなく、子ども達が高齢者を先導しておもてなしの行事の仕組みを作り高齢者をお呼びするという感じで準備をしてくれている。

(仲丸委員) 区社協でも福祉教育で学校の授業のお手伝いをさせてもらっている。区社協がお手伝いするところ以外に区内の高齢関係の社会福祉法人の施設が福祉教育のコマを持って施設のことを話しに行ったり遊びにきてもらったりしている。その中で「いつでも施設に遊びに来ていいのですよ」と言っている施設が多い。

3月末に2箇所の施設にインタビューした時、2施設ともそこに来ていた子が職員になってくれたことがある等、そんな繋がりもできてきている。地域と施設が一緒になるという切り口も上手くつなげていけるとよいと感じる。

(福嶺委員) 長津田地区の人口は4万人弱であり、29の自治会、小学校が3校、中学校1校ある。長津田では地域の人が“福祉のまち長津田”というスローガンを出していて、「支えあうって何」というテーマを掲げ、毎年小中学校の生徒が作文を書き、地区社協の方が中心になり各校5人位優秀賞を選び5月に表彰式を行っている。そこには、「数年後愛着を持って自分達のまちを見て欲しい」という気持ちがある。す

ぐに地域福祉の活動に結びつかないかもしれないが、数年後、例えば10年後に作文を通して少しでも思い出してもらえれば、地域福祉の活動につながるのではないかという思いで地域の方はずっと続けられている。また、作文は子ども達を書くが、父母が表彰式に同席する等、様々な世代に「福祉のまち長津田」だと知ってもらえることにもつながるので、すぐに結果が出なくても、やがて愛着というところでつながっていけばよいという地域の方の思いがある。

(名和田分科会長) 次世代の中には、「ひきこもり」とか「不登校」等重い議題があるが、これもいずれ議論したいと思う。

(仲丸委員) 今、地域でも話題になっている「貧困」の話題もどこかで議論したい。

(江森委員) 今回は、私の施設でも「こども食堂」を始めているのでその話もしたい。

(名和田分科会長) 我々も本日いただいた個別の資料を見て勉強しておきたい。それでは、次のテーマ、高齢者の説明を事務局にお願いしたい。

《高齢者》

(事務局) 資料5 (高齢者) について説明

3期計画としては、「高齢者の幅広い参加を促すための取組を推進していきましょう」「意欲と努力が発揮できる新たな出番づくりによる地域活動の活性化を進めましょう」等、計画に位置付けられている。取組の中では、元気づくりステーションなどの取組が増えてきた一方、老人クラブ数は増えているが会員数は減ってきている。高齢者の人口は増えているはずなので、参加の場としてシニアクラブが選択されないのか選択しなかった人はどこに行っているのか等も次計画に向けて考えなくてはいけない。また、いただいた意見には、多様な価値観の方がいるので、担い手を打ち出さずに気軽に参加できる選択肢(活動)を増やす必要があるという意見があるが、実際それは何なのかのお話もいただきたい。また、趣味の活動から始めても最終的に地域福祉活動に結びつくようになってもらいたい。そのあたりの工夫、上手くいっているところの事例や意見等をいただければと思う。

(福松委員) 保健活動推進委員は、地域の健康づくりをテーマに活動しているのでウォーキングや体操が多い。それぞれの区でやっていることの中で「元気づくりステーション」も増えてきて、その中には、体操教室・趣味的なグループもある。私は、地域の中で「女性の会」を開催しており、1ヶ月の中で2回は体操、1回は趣味に関する活動を行っている。

健康づくりに関して、今、皆さんとても関心を持っており、横浜市のウォーキングポイントが来年の3月でひと区切りになる。ウォーキングポイントには、200ポイントたまると3,000円、長い期間続けられた方には1,000円のお買い物券などが当たるお楽しみがある。以前は40歳からだったが、今は18歳からになった。港北区は、人口の割には参加人数が少ないため企業にお願いに行く等努力している。

体操教室以外には、保健活動として、テーマが「禁煙」「分煙」「受動喫煙」等、煙草に関しての運動、癌健診等の「健診を受けましょう」という活動をしている。「ロコ

モ（関節や筋肉が落ちてきて動けなくなること）予防」「認知症理解・予防」のため、体操をすることで元気に今の生活が続けられるとそれぞれ活動をやっている。健康づくりに関しては、皆さん関心が広まっているように思う。

（名和田分科会長）健康づくりへの関心が高まり、活動に参加することをきっかけに保健活動推進員になってくれるということはあるか。

（福松委員）保健活動推進員は、任期2年で定年は78歳。若い方はお仕事を持っている方が多いため、78歳に近い人からウォーキングに参加された方に声がけしている。

（名和田分科会長）活動者が推進員になってくれる場合がけっこうあるということか。

（福松委員）今、「つながり」で「健康づくり」と言われているが、「健康づくり」で「つながりづくり」につながっているように感じる。参加するにあたりお楽しみがあった方がよい。私は師岡地区だが、樽町地域ケアプラザに行くのに坂道が多く、バス便がないのでふたつ山を越えないと来れないという地域性もある。

（合田委員）私は地域にある地区センターを運営しているNPOに関わっている。

地区センターではどこでも料理教室や、最近では、男性のための料理をやっている。私の関わっている地区センターでは、月に1回カレーの日を作り地域のお子さんに夕方無償で提供、その時のボランティアは、男性のお料理教室への参加者も加わり1回に5～6人集まってくれる。何か大きな意識ではなく、日常の地区センターの活動の中から地域に役立つ活動につながる場を設定すると、気軽に入ってきていただける感じがする。

（名和田分科会長）地区センターでは、地域の交流拠点としての取組を積極的にしている。その場合、調理室にある器具は、それ用のものが用意されているのか。

（合田委員）調理器具もあり、人手と若干の材料費さえ用意できれば比較的取り組みやすい事業である。

「こども食堂」も考えたが、名前をつけると対象を限定してしまう。今は、友達同士気軽に楽しい時間を過ごすのも良いだろうと、難しく考えずに結果的にこども食堂的な役割も果たしていればよいかと思っている。

（中野委員）今時の音楽はCDやYouTube等一人で聴くことが多いが、高齢の方の家には昔の円盤のレコードがあるので集まってジャズを聴こう、その時に本格的珈琲を入れようという取組を今宿地域ケアプラザで始めた。女性はおしゃべりが進むし話題も豊富だが、男性はそこが苦手なので、古いジャズのレコードと珈琲で集まってもらおうと、何人もエプロンをつけて参加してくれる。「趣味を楽しんで」「幅広い参加」という部分は、『福祉』と言わないで「心許せる人達との出会いの場」があれば良いと思った。

「出会いの場をどう作るか」がポイント。目に見えない形で仕掛け・作戦を練るのが私達プロフェッショナルの仕事だと感じる。そもそも自然発生的にできたように見えるが、実は周到な「仕掛け」があったという。「仕掛け」をどうやって作るかを我々がこの場で相談することだと思っている。

(名和田分科会長) 福祉施設に限らず社協も含め、専門機関、常駐職員等もここでも話題にしたい。

(松本委員) 旭区今宿地域ケアプラザでは、先ほど話があった「珈琲隊」の活動があり、NHK の番組でも紹介された。最近はそれに加わりたいという人も多く、講師編という形で活動も広がっている。出張もするようになり、ケアプラザからスタートし、必ずレコードをかけるとは限らないが地域のサロンで珈琲を入れる活動をしている。この活動の参加者は男性ばかりでなく男女ともいるが、通常の活動に比べると男性の参加率が高い。

(名和田分科会長) どの地域でも男性を引っ張り出すのに苦労している。

(江森委員) 高齢者の孤立・引きこもりは若者のそれと大きな違いがある。若者の引きこもりには、就労未経験の方が散見されるが、高齢者の引きこもりは昔社会で活躍され何かの原因で引きこもりになってしまった方が多いと思う。例えばご本人のプライド故に意地を張ってしまい社会に出られないケースがある。その意味で珈琲やジャズはご活躍の時代を思い起こせるので非常によいと思う。

(名和田分科会長) 最近、コミュニティカフェが流行っていて、緑区のオレンジカフェで珈琲を入れている。何故カフェなのかというと、珈琲等の気軽な飲み物が人を引きつける魅力があると感じる。

高齢者の比較的深刻な問題である「引きこもり」や「孤立」にも気軽な場・機会を用意することが重要であるという意見が相次いだ。

(仲丸委員) 区内の地域ケアプラザの生活コーディネーター連絡会では、サロンや集いの場に来られない人をどうしようかということが一番の課題である。誰かが誘うと来られる力はあるけど一人では来たくないから孤立して引きこもってしまう方をどうするかは、仕組みでは解決できないし、何か考えていかないといけないという話になった。能力がある人に来てもらうのではなく、何となく気持ちが動かない人をどうやって盛り上げていくかが、今地域の中で言われている。

(中野委員) 以前、出て来ない方に、『会長、会長のご挨拶がないと始まらないです。』『教授!』『部長!』等と、過去の役職名でお呼びしたら動いてくれた方もいた。

(竹谷委員) 高齢者の場合、癒しを求める方と社会貢献を求める方と多様化していて困っている。昔は、親に仕送りすることはあってもオレオレ詐欺のように親から金を取るようなことはなかった。ところが最近困るのは、癒しを求める人は、老人会は煩わしいから自分のお金でジムやカルチャーセンターに行く。老人会の会費も高く感じるようで、「そんなに高いなら(老人クラブには参加しない)」と社会奉仕などよりお客様扱いしてくれるところに行ってしまう。また、元気な方はパートで働きに行ってしまう。そのため老人会は経済的に弱い人の集団になりつつある。そうすると若い後継者が育たず何かのはずみに潰れてしまう。それを避けるために今、定年制にして若い人の意識を変えようとしている。そこが一番辛いところである。

(名和田分科会長) 老人クラブの、「ご苦労さんと言ってもらうための老人会」から「社会奉仕の老人会」まで世代差があるというのも一つの着眼点だと思った。この歳に

なっから丁稚奉公からやらなくてはいけないのも考えてしまうし、そのような二重構造がある中、今の70～80歳になる方が求める特殊な世界観があるのかもしれない。そう考えるともう少し老人クラブの未来は明るいかもしれない。その辺に少し留意したい。

(竹谷委員) アメリカにはAARP (アメリカの老人クラブ) があるが、昔はケネディーも入っていた。現在は3千数百万人の会員がいる。売りのひとつは、老人会に入ると保険に入れること (アメリカではオバマケアでないが保険には簡単に入れない)、もうひとつは、政治活動ができること、一番私たちがマネしないといけないのは、「プラットホーム活動」(高齢者の持つエネルギーを上手く社会活動などの軌道に乗せてあげる仕事)、この3つのメリットがあり発展している。これは勉強しなくてはならないと思う。

(名和田分科会長) 高齢者は、さらにたくさんありそうだが次の当事者の話にいきいたい。

《当事者》

(事務局) 資料5 (当事者) について説明

3期計画のポイントはふたつあり、ひとつは「ハードが整備されても使う側の意識がきちんと整っていないと意味がないので正しい認識、理解を進めていきましょう」ということ、もうひとつは、「多様性理解の普及啓発を広めよう」「当事者の社会参加を促進していきましょう」、こちらは、いろいろな当事者があるので、「障害当事者」としての困りごと、逆に障害当事者であるからこそ地域に出て伝えていく役割等、障害当事者が地域の中で参加・つながっていく視点と、引きこもり等社会に適合しづらい当事者が最終的に就労や地域など社会につながるようなポイントで御意見をいただきたい。

(名和田分科会長) 当事者というのは、暮らしにくさを感じている本人ということで様々な方がいらっしゃる。その意味では他の項目と同じように皆様から意見をいただきたい。

(井上委員) 横浜市身体障害者団体連合会から推薦されて来ている。横浜市では、あらゆる障害の方がいるラポールを中心に動いている。いろいろな障害がある人でもラポールに来ると明るく話もするし悪ふざけもするが、町の町内会や老人会の集まりにはほとんど参加する人がいない。小さい時からのトラウマがあり仲間に入りたくない気持ちがあるのと、中途障害の人はプライドがあり入りきれない。障害者の仲間同士は、お互いにできないことは支えられる人が支えてと無言のうちにできるが、町の人々の集まりには入りきれない。

例えばスポーツでグランドゴルフをやる場合、ゲーム中の歩くスピードについて、障害者はどこか不自由なところがあるため健康な方についていけない。障害のある人が老人会に入っても傷つく事が多く町の人と共有することは難しい。

災害防災訓練に出席すると、障害の人は危険だから見ていてくださいと別枠にされる。そういうことがあると町の人達と何かすることは遠慮してしまう。なんとかし

ようという話はしているが進展は見られない状態である。

(名和田分科会長) 非常に触発されるお話で、是非これを起点に意見交換をしてみたい。

(畑尻委員) 先ほど三世帯交流という話をしたが、保土ヶ谷の私の地区は障害者等の施設が多くあり“ゆめ”という施設もある。そこで、地域のミニ運動会にそのような施設の方を招待した。始めは嫌がっていたが、3～4年やっていると施設の所長さんも熱心な方でお母さんお父さん、子どもも一緒に来てくれるようになり、三世帯の方と我々高齢者と地域の人と一緒に交流ができるようにやっと軌道に乗ってきたところである。町内会の方達に「地域の福祉の関係の人が来るんですよ」と知らせて一緒に遊べるようにすることが大事だと思う。今年も10月の第4日曜日に開催するため実行委員会を立ち上げ検討を始めている。

(竹谷委員) 我々の地区では、運動会に障害者がいる家族を招待し、その家族の方が座れるテントを設けている。また、町を歩いていただくために付き添いの人が付いて各家庭に溜めておいてもらったアルミ缶と一緒に収集するような継続的に役割を持って元気に歩いてもらう活動をしている。

これからは、高齢の方で障害者に近い方も増えており、サークル活動にも消極的にしか参加出来ない人が増えてきているので、そのような方でも参加できる会を作っている。具体的に何をやるかという、音楽（誤嚥を防ぐよう喉を鍛えるためカラオケ）・体操（座ったまま・首を動かす等その人にあったもの）・社会科（ぼけ防止・お孫さんと話をする時に話題についていけるように今話題のトピックスをやる）等、他の方と同じように200～300円参加費をいただき、お茶菓子を出し何もしなくてもそこに来ているだけで楽しい会を開いている。

(井上委員) そのように分かって迎えてくださるところには、行きやすいと思う。分かっても別扱いされると傷ついてしまう。同じ輪の中で一緒に冗談等を言えて同じに扱ってくれる気持ちがあると安心する。

(名和田分科会長) 畑尻委員がおっしゃったように、イベントは単発でも、継続することにより地域の理解が深まることもポイントの一つだと思う。

(井上委員) 私もそう思う。仲間同士は、あそこいくと皆一緒に扱ってくれて楽しいよと誘い合える。

(中野委員) 横浜市の男女共同参画の市民提案事業の審査員をしている。毎年、LGBT*の若者が良い提案をしてくれる。活動も立派で若者らしい工夫がされていてとてもよい。その方たちが望んでいるのは、学校に行って基本的な話をする機会をもつことだが、学校側にはカリキュラムがあるので実らずにいる。うまく小中高生に目に見えていないがいるんだよということを伝えそれが変に思われない世の中の気持ちを作り出していくことは当事者以外の人でもできることなので、福祉教育に取り入れてもらう機会をお手伝いしたいと思っている。

*) LGBT (エル・ジー・ビー・ティー) または GLBT (ジー・エル・ビー・ティー) とは、女性同性愛者 (レズビアン、Lesbian)、男性同性愛者 (ゲイ、Gay)、両性愛者 (バイセクシュアル、Bisexual)、トランスジェンダー (Transgender) の各語の頭文字をとった表現

(福嶺委員) ケアプラザは当事者の方々にお部屋を使ってもらえる事が多いが、脳の病気の中途障害の方々就業体験としてケアプラザを利用してもらう機会があった。将来就労につなげたいが体験をする場がないという要望があり、3日間ちゃんと朝9時に来られるかというところから生活面の応援をさせていただいた。この事からケアプラザの役割として場所を貸すだけでなく生活面にシフトして活用できると新たな発見をした。

(名和田分科会長) 実は、私が関わっている港南台タウンカフェでも引きこもり等の受け入れをしている。何時に来るではなく、ボランティアで好きな時に来て関わってみたらという少しずつ社会に送り出す機能の役割を果たしている。本当の職場ではないが中間的な職場の役割が広がると嬉しい

(江森委員) 生活困窮者の自立支援法は2年前から施行されたが、生活困窮者に対して横浜市から就労訓練事業の認定を受けており、現在対象者は一人、少し前まではもう一人いた。そこに来る方は40歳代の引きこもりが多いが、いろいろなパターンがあり、引きこもりではなく、親御さんによる抱え込みだったりする。要は当事者以外のところに大きな問題が出てくるパターンがある。現在通われている方にも高齢のキーパーソンがいらっしゃる。本人に食事を提供し、それをツケとして使用人のように使われていて本人の生活設計のところまで持っていけない状況であった。本人に対してケアはできるが、家族や周りには支援が届かないというジレンマがある。この制度は伴走型の支援で、生活保護等の措置費がでるわけではないので、役所の支援も届きづらい。ただし横浜市の中に生活困窮と生活保護を一体的に取り扱う課があることは非常に心強い。他府県ではないものである、これからそのようなところをどのようにフォローしていけるかが課題である。

(名和田分科会長) 「地域に何が出来るか」は、重たい課題である。事務局としてメモしてもらいたい。

最後の「あらゆる市民」について、究極の地域福祉だが事務局から説明願いたい。

《あらゆる市民》

(事務局) 資料5 (あらゆる市民) について説明

ここにある項目としては、参加のきっかけの前に地域福祉保健に関心を持ってもらうために、取組として「地域福祉保健計画のPR」「気軽に参加できるような選択肢」「きっかけとつながりづくりの大切さ」「各世代が抱えている課題を当事者達の関心を高める」等を挙げている。気軽な参加から活動にどのようにつなげていくか等のアイデア、地域福祉保健活動を促進するために何が必要か等ご意見をいただきたい。少し戻るが、お子さんの課題の議論はしていただいたが、親御さんについても課題だと思われるので、支援機関側の役割(戦略的に場を設定する施設と地域をつなぐ役割等)も併せてご意見をいただきたい。

(名和田分科会長) 確かに次世代のところ親御さんの方の話をしていなかった。今度はあらゆる市民が論点なのでその辺も含めてどうか。

(佐伯委員) 自分の中で地域活動の視点でいうと図書館はどうかと思う。健康づくりも大事だが、生涯学習的なもので、地域の中にある図書館を集まる場所として活用できるのではないか。昼間の図書館にはシニアの方もいるのでサークル活動等で集まることはできるのではないか。

(江森委員) 今の話でいうと、生活困窮の問題は、生活困窮の家庭のお子さんが生活困窮となる、いわゆる「貧困の連鎖」になってしまう例を良くお聞きする。お子さんをそうした負の連鎖から断ち切り一般的な就労の形にもっていく中で、今、中学校から 穀高校にあがるところの学習支援はよくなってきている。しかし、基礎学力にもう少し目を向けるべきで、小学校の基礎学力を図書館でシニアの方々に勉強を教えてもらえるようなことができるよ。

(名和田分科会長) 港南区の地域福祉保健計画の委員会のあるケアプラザのコーディネーターが、「図書館に人がたくさん集まっているのにもったいない」と言っていたのを思い出した。その割にはあまり変わっておらず、地区センターはかなり変わって来たが図書館もひとつの着眼点だと思われる。

(江森委員) 居場所のない子ども達に図書館が居場所になるのはとても良いことだと思う。

(松本委員) 次世代の項目に入るかもしれないが、旭区の民生委員の取組としてジュニアボランティアの事業をやっている。区内の 24 校ある小学校の 5～6 年生の希望者を募り、民生委員が地域で行う共同募金、地域のイベント、ケアプラザのイベント、福祉施設への見学等を一緒に取り組んでいる。旭区の 20 地区の民生委員がそれぞれ工夫して実施している事業がある。毎年 8 月 1 日が就任式で 12 月上旬に体験発表会があり、体験文集などが作られる。18 年位やっている。

中学生世代にどう展開するかが次の課題。検証はしていないが子どもから伝わる親御さんの世代への効果は感じられる。

(名和田分科会長) それは是非、検証を行っていただきたい。

(仲丸委員) 戸塚区では、「社会福祉法人と地域つながる連絡会」を開催し、社会福祉法人の地域貢献も含めた意味で、地域と社会福祉法人をどうつなげていこうかと考え 3 年間活動を続けてきている。直近の事例では、地域・社会福祉法人・地域ケアプラザが事例に対して自分だったら何ができるかについて意見交換を行っており、お互いが求めていることや何をすればよいかを知る機会になっている。また、施設の方々から「自分達は何をしたらよいかわからないから、地域ケアプラザにつきぎをやってもらいたい」とよく言われ、今はそのつきぎをどうしたらよいかについて検討している。そこもキーポイントになるだろう。

似たような事例で地域の方々に地区別計画の一般論を説明すると、「私たちは何をすればよいの」「事例を教えて欲しい」とよく言われる。上手くいっている事例を伝えるのも大事だと感じる。専門職としては課題と結び付け、ニーズをしっかりと捉えて誰が何をするかを考えて進めていかなくてはいけないと感じている。

(名和田分科会長) あらゆる市民については、やや積み残しがある気がするが、後は事務

	<p>局で本日の話を検証していただき2回目以降、有効な話し合いが更にできるように準備をしていただきたい。</p> <p>非常に意義のある議論をありがとうございました。最後に報告事項を事務局からお願ひする。</p> <p>報告</p> <p>(事務局) たくさんのご意見をありがとうございました。次回は、4期に向けた本題である、いろいろな主体が協力して地域でどう活動できるか、またどう取り組んでいくかについて、本日いただいたご意見も踏まえ深めていきたい。</p> <p>江森委員、仲丸委員にも参加いただいているので、少し実践事例を紹介いただき、その後、皆さんの立場からご意見をいただき議論をしたい。次回に向けて少しテーマを分科会長と詰めて、今回と同様、事前に資料をお送りしたい。</p> <p>(名和田分科会長) 本日お配りした参考資料にもいろいろ実践事例が書いてあるので、勉強した上で各自の立場で意見をいただけることを期待している。</p> <p>本日はありがとうございました。これで終了いたします。</p> <p>閉会</p>
<p>資 料</p> <p>・</p> <p>特記事項</p>	<p>○平成 29 年度第 1 回横浜市地域福祉保健計画策定・推進委員会</p> <p>分科会 1 「多様な主体の参加と連携による支え合いの地域づくり」 次第</p> <p>○横浜市地域福祉保健計画策定・推進委員会 分科会 1・2 参加者名簿 <資料 1 ></p> <p>○第 4 期 横浜市地域福祉保健計画策定にかかる分科会について <資料 2 ></p> <p>○分科会 1 の進め方 <資料 3 ></p> <p>○横浜市の状況について <資料 4 ></p> <p>○分科会 検討シート <資料 5 ></p> <p>○データ集 (横浜市の状況等) <参考資料 1 ></p> <p>○アンケート結果 (社会福祉法人・企業等向けアンケート結果) <参考資料 2 >※</p> <p>○事例等 (社会福祉法人・企業・学校と地域との取組事例等) <参考資料 3 >※</p> <p>○横浜市社会福祉協議会広報誌「福祉よこはま」No.184 (2017 年 6 月 14 日版) ※</p> <p>(※当日配布資料)</p>